明治三十年の内藤素行書簡 ―浦屋寛制宛―(三) 谷 光隆 …… 一
子規など文人たちと久万 ―涓涓集から― 和田 正 …… 一一
子規と盲天外 今村 威 …… 一八
組織者としての子規 ―「筆まかせ」について(一)― 越智 通敏 …… 二六

子規會誌

七一号
平成八年一〇月

例会記録

○六月例会（第六四一回）

平成八年六月十九日（水）　正宗寺　出席二十九名

講演「不器男とわたし」

不器男記念館長　名本琴舟

卓話「酒井黙禅さん」

子規会理事　平松好乃

○七月例会（第六四二回）

平成八年七月十九日（金）　正宗寺　出席二十一名

講演「鮎若し――長谷川秋子の魚の句について――」

会員　長井通保

卓話「浦屋塾に育った人々」

副会長　浦屋薫

○南予支部会

平成八年八月六日（火）　宇和町卯之町松屋旅館ホール　参加七十名

（宇和町文化の里まつりの一環として講演会が行なわれ、南予支部会と共催された。）

講演「南無阿弥陀仏一遍」

副会長　越智通敏

○八月例会（第六四三回）

平成八年八月十九日（月）　正宗寺　出席二十八名

講演「海南新聞選者井手真棹と日清日露との関りについて」

理事　井手康夫

吟詠「子規詩歌」

会員　松本松陽

明治三十年の内藤素行書簡

―浦屋寛制宛―（二）

谷　光隆

六　山本忠彰の経歴

前稿では、谷口藍田の道後温泉来浴について述べたが、それはどうも藍田と師弟の関係にあった山本忠彰の勧説によるものらしい。この山本忠彰は旧松山藩の出身で、達識能幹を以て聞こえた郷党の先達であり、大正十一年、愛媛孔子祭典会の発行した『孔夫子伝並従祀者略伝』には次のように記述している。

山本忠彰は松山藩士なり。幼名新三郎、後新一と改む。木堂又石浪山人の号あり。松山市南堀端に生る。資性学を好み、経義に通じ、詩文に長じ、最も書を善くす。明治の始め、松山藩権大参事となり、後、久松家々令となり、又出でて、陸軍裁判大主理を経て、晩年第一師団法官部長に任ぜらる。忠彰、資性慷慨にして気節あり。王政維新の際、松山藩の去就に就いて頗る苦慮する所あり、自ら土佐に使し、山内容堂侯に見え、画策其宜しきを得たりと云ふ。又青年有為の士を養成するを以て無上の娯とし、嚢中為めに空しきを訴ふるを常とせり。松山同郷会を興して青年修養に資したるが如きは、其美績として世に称揚せらる。現今栄達せる松山の名士は、多く其指導によると云ふ。明治卅一年を以て東京に逝く。墓は青山にあり。

また、城戸八洲編著、愛媛県文化協会発行の『伊予偉人録』も概ね前文に拠っているが、やや記述を異にする後半の部分を引用すれば左の如くである。

又青年有為の士を養成するを以て無上の楽みとし、懐中ために乏しきを常とした。加藤拓川の如きも恩顧を受けた一人である。松山市三番町に青年修養のため現存する松山同郷会の創立以来東京支部長として在京学生らの世話をなすこと多年。明治三十一年に卒す、年六十余。墓は東京青山の塋域にある。

右の小伝から伺われる彼の経歴でこの際とくに注目されるのは、明治の始め、松山藩権大参事となり、後、久松家々令となったこと、晩年第一師団法官部長となったこと、及び松山同郷会を興して青年有為の士を養成するに力め、その東京支部長となって在京学生の世話をしたこと、などである。(1) そして、この同郷青年育成の志は、実に常盤会創設の先声をなしたものであった。すなわち、講談社版『子規全集』第十巻の参考資料中に『常盤会及常盤会寄宿舎史』（大正

四年五月十五日常盤会刊）の抜萃があるが、その中まず「常盤会史」を見ると、冒頭に次の一文がある。

明治十四五年の頃旧松山藩出身在京者相図り各自の醵金を以て一つの財団を組織し、郷党子弟の修学を誘掖補助するの計画をなしたるが、年を経るも山本忠彰の五拾円醵金せる外、一人の醵金者無く、遂に折角の計画も水泡に帰せんとせしかば、明治十六年有志者は、更に浜町久松邸に会し、各自も必ず醵金すると共に、久松家に幾分の醵金を歎願し、以て前計画を実行せんとせり。

そして、この歎願に接した久松家では、同家の出金のみを以て、この事業を経営せんと回答したので、有志者は各自醵金のことを中止してこの事業を久松家に一任することとし、明治十六年六月に常盤会が創設せられたのである。

また、「常盤会寄宿舎史」を見ると、その年間行事の一として「記念会」というのがあり、次のように説明している。

明治二十年十一月三十日開舎式を挙行し、翌十二月一日入舎を許可せしを以て、以後十二月一日を記念日とし、毎年久松伯爵及び御子方、松山出身の紳士、舎友を招待し、日中は運動其他の遊戯をなし夕刻より式を開き役員より挨拶を兼ねて、寄宿舎の過去一箇年間の状況、会計等を披露したる後、粗末なる酒肴を呈し、且来会の先輩諸士の高説を聴くこととなし、現今も之を継続せり、尤も十二月は舎生の多数が試験準備に忙しきを以て近来は之を繰り上げ、十一月初旬の土曜日若くは日曜日に挙行することとなせり。

そして、これと関係するのが全集別巻一の子規あての書簡（六六九頁）に見える「山本忠彰より」の一通である。

拝見　陳者来ル廿九日午後第二時ヨリ常盤会設立第四年期御祝宴御催候ニ付御案内被下敬承仕候　御指定之時刻参会可仕候

右御受迄　草々頓首

明治廿四年十一月廿七日　山本忠彰

正岡常規殿(2)

山本忠彰は、前述のごとく常盤会の創設に与って力のあった同郷の大先輩である。この書簡は、彼が「松山出身の紳士」として右の記念会に招待されたときの返書であり、その宛名が正岡常規である所を見ると、この年の会の幹事役は子規であったのであろう。管見の及ぶ限りでは、これは子規と山本忠彰との間を直接結び付ける唯一の資料である。

以上で、郷党の先達としての山本忠彰については、大凡その輪郭を描き得たことと思う。しかし、そこには彼が谷口藍田と師弟の関係にあったことについては一言も触れていない。本稿ではむしろこの点にこそ検討を加えることが必要であるが、それには『藍田先生全集』が最も有力な手懸りとなるので、以下、もっぱらこれに依拠してその事実を確認することとしたい。

さて、両者の関係は、藍田が明治二十三年東京に入って遂にこの地に留ることとなった以後のことで、まず注目すべきは「藍田先

生年譜」の明治二十四年辛卯、先生七十歳の条に、

先生在蜀江山講道。…士軌乃与高崎男・山本忠彰・松岡帰之・岡野正理・水本兼孝・阿南尚・瀧川長教・平沼騏一郎・小山温・湯川慎三郎等謀、開篤信学会於麹街、掲巻首所載之学規、以大講斯道、学者日月進。…

とあることである。すなわち明治二十四年、藍田の講学所として篤信学会が麹町に開かれるとき、恩地士軌が最初に相談を持ち掛けた十人の同志の中に山本忠彰の名があり、しかもそれは高崎男爵正風に ついで二番目に記されている。

それからまた全集巻二の紀行・日記類（北海紀行・信越紀行・王邸日歴抄・日光紀行・山陰紀行）を見ると、その中にも山本忠彰の名が十五回、単に山本とあるのが五回（内、一回は山本妻女）出てくる。その具体的内容を数例紹介すると、明治二十五年の十月五日（陰暦八月十五日）は藍田の誕生日である所から、蜀江山で賀宴が設けられ凡そ百余人が来会したが、そこでも「来会者尾崎三位忠治、高崎男爵五六、山本忠彰……」とあって、忠彰の名は枢密顧問官尾崎忠治、北白川宮家別当高崎正風についで三番目に挙げられている。また、明治二十六年に藍田は信濃・越後方面を歴遊したが、その出発日の七月十一日には、尾崎枢密顧問官忠治、高木大審院判事勤及び山本陸軍理事忠彰、その他多数の者が新橋停車場まで見送りに出、八月二十五日帰着の際にも出迎えている。また、明治二十七年一月二十三日、北白川宮邸で藍田が『詩経』・『左伝』を講じたときには、「山本忠彰亦た来聴す」とあり、二月一日も同様であった。また、同年九月二十五日、忠彰が軍に従い韓清の戦地に赴いたときには、藍田が贐を贈り末子（五男）の豊五郎が忠彰を四谷停車場に見送っている。また、明治二十八年七月十五日には、前日台湾より帰来した恩地士軌が藍田父子及び忠彰を招いて現地の風土を談じており、同年八月十八日には、藍田が忠彰より近く台湾に赴く旨の書信（士軌の弟恩地顧太郎士諶と同行）を得、二十日にその答書を作っている。

以上、数々の事例をあげて検証すると、藍田と忠彰との間の師弟関係は、単に日常の講席に列なるというような通り一遍のものではなく、別して昵懇な家族的交際関係にあったことが知られ、その門下における地位も、ほとんど恩地士軌につぐ位の側近であったことが分かる。これは忠彰の学識もさることながら、彼が旧松山藩の権大参事[3]や第一師団法官部長などの要職を歴任したということにもよるものであろう[4]。

七　北白川宮能久親王と久松定謨

前節では、山本忠彰について種々の角度からこれを検討し紹介したが、要するに初対面となる谷口藍田と浦屋寛制を結び付ける中間項として存在したのがこの山本忠彰であり内藤素行であった。これは書簡の文面からも直接窺い知ることのできる関係である。次に筆者は、書簡の文面には全く見られないが、もう一つ重要な中間項として北白川宮能久親王[5]と久松定謨伯[6]のあることを指摘しておきたい。

この両者の特殊な人間関係は、必ずや藍田・雲林（寛制）対座席上の好話題となったことと推察されるので、繁を厭わず暫くこの問題を解説し、また詳細にこれを吟味することとする。

前稿に掲げた谷口藍田の小伝によると、藍田は同親王と深い心交を結んでいた。それは親王が熊本の第六師団長であった当時に進講したことから始まり、爾来、親王の尊信を受けてその王子王女の教育をも託され、同宮邸内の学問所に仮寓すること二年、また後述するように親王が台湾に発去されると、宮内省の命によってその墓誌銘を撰したのであった。そして、親王と定謨伯との関係は、日清戦争及びその直後の台湾鎮定に際し、親王は近衛師団長として、定謨伯はその副官として出征した、ということである。そこで、以下にはこの点を取り上げ、詳しくその経過を辿ってみよう。

親王は明治二十八年三月二十五日、近衛師団長として征清の途に就き、四月十三日大連に上陸、ついで金州・旅順などを巡閲されたが、同十七日に講和条約が成立して我が国は台湾・澎湖島の割譲を受けることとなった。しかし、このため台湾では島民が蜂起して独立運動を起こしたので、親王は命を奉じてその鎮定のために出師し、五月二十二日旅順を出発、二十七日沖縄県中城湾に集合の上台湾に向かい、三十一日同島北端の三貂角澳底[7]に上陸、瑞芳、基隆、各地の敵を撃攘して、六月十日台北城に入り、ついで七月新竹に進軍、八月台中・彰化の両地を占領し、十月八日には嘉義を攻略、その二十二日に台南に入城された。

この間将兵は嶮難と炎熱との中で悪戦苦闘を続けて来たので、親王には十月十八日嘉義進発の頃から不例を感ぜられ、容体宜しからず、漸次体温が上がってマラリヤの兆候があった。そのため、それまで乗馬で進軍されていたのを翌十九日には轎に召し替えられ、二十日も同じく轎で湾裡まで進まれたが、道路が悪く、疲労も増し、熱は三十九度八分、脈搏も速くなった。そしてこの夜、親王は側近の者に対し、轎は身体の健全なときには心地がよいが病気のときには宜しくない、何か他に乗るものはないか、と仰せられたので、翌日には担架を急造して毛布を敷き[8]、親王は軍装のまま靴も脱がれないでこれに臥し、土人に担がせて徐々に進み、親王は頗る楽だと仰せられたが、それでもこの日大目降に到着された後の熱は四十度一分に達し苦悩もあらせられた。しかし、その翌二十二日にも同様にして担架で進まれ、三里二十四町を経て午後五時三十分台南城に到着、いったん安海街の張桂芬宅に入られ、翌日呉汝祥の宅に移られた。

台南に到着されるまでの御泊所はほとんど野営にも等しいものであったが、台南の御泊所は富豪の邸宅であっただけに宏壮で[9]、且つ先着の第四旅団長伏見宮殿下も直ちにお見舞になり、ご兄弟久々にてご対顔、また石坂軍医総監、谷口軍医監、西郷軍医正等も居合わせ、治療上はもちろん休養の点でも行き届いて、お付の人々も初めて安心したのである。しかし病勢は漸次昂進の模様で経過は宜しからず、二十七日台湾総督の樺山資紀が病室に伺候し、台湾もほとんど平定致しました。これ畢竟殿下のお帥いになる近衛師団の功績でありまして、ご任務もすでに完了致しました、と申し上げたとき、

お眼を開いて頷かれたのが最後で、翌二十八日午前七時十五分ついに薨去された。御年四十九。このため翌二十九日にはご病気ご危篤の体で伏見宮殿下を始め文武官一同が安平までお見送りし、汽船西京丸にご遺骸を移し、軍艦吉野がこれを奉護して十一月四日横須賀に入港、この日特旨を以て陸軍大将に昇任、ついで十一日国葬の礼を以て豊島岡皇族墓地に奉葬せられた。[11]

その墓誌銘は前述のごとく、宮内省の命によって谷口藍田が起草したものであり、『藍田先生全集』巻一に「近衛師団長陸軍大将大勲位功三級能久親王墓誌銘」として見えている。[12] いま、その全文を掲げることはしないが、その末尾には「嗚呼、古に日本武尊有り、今に北白川宮有り、双絶と謂う可きなり」（原文は漢文）とあり、さらにそのあとに次のような銘文を付している（原文は漢文）。

清国和を請ひ　遼東を還与す
戦艦南に転じ　瘴霧空を蔽ふ
険崖深谷　馬蹄通ぜず
敵散ずるも復聚り　頑固にして攻め難し
辛を嘗め苦を喫するは　士卒と同じく
唯国有るを知りて　躬有るを知らず
我が師闘武なること　虎の如く熊の如し
渠魁遠く竄れ　万民風を仰ぐ
台の広漠　我が疆封に入る
千古比無きは　親王の功なり

能久親王の御事跡については以上に止める。次に親王と定謨伯との関係であるが、これについては、伯の嗣子定武氏が往年、父、定謨について語った談話が最も参考になる。しかしその前にいま一度、親王の伝記『能久親王事跡』[13]の中から親王薨去翌日の模様を記した左の一段（二六一―二頁）を紹介しておこう。

二十九日、午前六時歩兵少佐佐本寿人の率ゐる一行、宮の御柩を奉じて台南を発す。表には宮御病の為めに帰らせ給ふと沙汰せしめき。御柩に随従しまつるは、近衛師団軍医部長木村達、歩兵少佐佐本寿人、師団副官久松定謨中尉歩兵。同伊達紀隆少尉歩兵。特務曹長菱田栄和、家扶心得高野盛三郎、家従心得山本喜勢治、従卒中村文蔵及兵卒九人、看護人二人、力士数人なりき。初め宮の台湾に泊らせ給ひしとき随従しまつりし家令心得恩地轍、家扶心得高屋宗繁の二人は先きに帰りぬ。馬丁は松本政吉、田村喜一郎、田中倉吉の三人なりき。安平にて御柩を西京丸に載せまつり、軍艦吉野もて護衛しまつる。十時三十分抜錨す。貞愛親王を始とし、樺山資紀、高島鞆之助、乃木希典等の諸将埠頭に送りまつる。

さて、定武氏の談話を記録した『久松定武は語る』の中から右の一件に直接連絡する部分（三六―三八頁）を抽出してみると、それは以下のようである。

明治二十七年には、日清戦争が始まります。近衛師団長北白川宮能久親王の副官として従軍しました。戦争が終わって、台湾に転進します。台南で、能久親王が逝去されました。明治二十八年十月二十八日のことです。マラリアでした。定謨は最期

までお側について看病しました。御承知のように、マラリアは伝染病です。父も感染しました。しかし、病気をおして、親王のご遺体を船に乗せ、台湾海峡・東支那海を通つて凱旋しました。土佐沖で、父は危篤になりました。奇跡的に助かつて帰つたのです。後になつて、父は「親王にお仕えする気力だけで病気の体を支えたようなもの」と、語つていました。

そういう関係で、今も、北白川宮家とはお付き合いを願つています。また能久親王の妃殿下（富子）は、宇和島の伊達家の出です。したがつて、わたしとは御縁が深いわけです。皇后陛下の女官長をしておられる北白川祥子さんも北白川宮家の出です。

明治二十八年、日清戦争に父は北白川宮能久親王の副官として出征、古例によつて旧家臣中から四天王、従軍記者として、正岡子規・河東可全・竹田博文・片岡某が同行し、中国の金州に行きました。子規には広島で佩刀を授け、金州滞在中の五月二日、同地第一の割烹店宝興園の宴に招きました。子規は感激して「陣中日記に」に記し、

行く春の酒をたまはる陣屋哉

と詠んでいます。また台湾で薨去された親王の金州御在陣の時を偲んでの追悼句を明治二十八年冬、「寒山落木」にのせています。

北白川宮薨御と聞き侍りてそゞろ涙せきあへず金州御在陣の時など只まぼろしのごとくに覚えて

しぐるれど御笠参らすよしもなし

右の文によって、能久親王に対する定謨伯の看病と奉護の模様は簡略ながらも伺われる。親王の妃富子が宇和島の伊達家の出であるというのは、同藩第九代の藩主宗徳（むねえ）の第二女で、明治十九年に親王と結婚したことをいうのである。但し当時富子は島津久光（幕末の薩摩藩主斉彬の実弟、忠義の実父で、維新後左大臣に至る）の養女となっていたので、『能久親王事跡』（一四五―六頁）には、

（明治十九年七月）十日、妃富子を納れさせ給ふ。伊達侯宗徳の女、島津公久光の養女にておはす。

とあり、また同書巻末の年譜には、

十九年丙戌、四十歳、東京におはす。妃山内氏光子病の為に家に帰らせ給ふ。妃島津氏富子を納れさせ給ふ。[14]

とある。

次に定武氏の文には、日清戦争に従軍した子規のことが書かれている。子規は周知のごとく近衛師団付の新聞記者として従軍したので、自然、能久親王とも定謨伯とも密接な関係をもち、「寒山落木」に見える一句もそこから生まれた感慨である。本稿は当面、谷口藍田―浦屋寛制の文脈の中で能久親王を取り上げているので、子規―親王の文脈は派生的、副次的なものとなるが、本誌の性質にかんがみ、これに関連してもう一つ披露しておきたい文がある。それは子規が明治二十八年十一月二日付で大原恒徳、佐伯政直の両人にあてた書簡である。[15] この書簡は、子規が例の最後の帰郷を切り上げて十月三十一日に東京に帰った二日後、早速その無事到着を国元に

報じたものであるが、「叔父上様　政直様」と宛名を書いた後にさらに次の文を追記している。

能久親王殿下御薨去被遊何とも申様なき次第に御座候　尤も御発表は四日と相定まり申候　私も従軍中は常に御側に居候事多く御笑顔抔今に眼底に残り居候　之を思へば万感胸に塞がりて欷歔に堪へず候　なみ〳〵の賤しきはにても全軍将に凱旋せんとする時病に殪れ候はゞ如何許りか家族共の歎き申さん　況してこれは竹の園生の御末最とやんごとなく渡らせ給ふ御身の万里の空に椰子の露と消えたまふこと誠に

御身寄の御方々の御心の中抔察するに余りありて涙の泉尽くべくもあらず候

右に付き

定謨公も或は御帰国にも成るべきかと御邸には御待受の御様子に見え候

伊藤氏にも一寸面会仕候へども御預申候品未だ相渡不申候　当日持参相忘候儀に御座候

右の文によると、子規は帰京の翌日、又は翌々日、芝の久松邸に挨拶に出向いたのであるが、それは能久親王のご遺骸をのせた西京丸が横須賀に入港する二、三日前であった。そして、金州では御側にいることが多く、その御笑顔も眼底に残っているという身近な体験から、親王の薨去にたいする子規の感慨は一通りでなく、切切たる哀悼の意がその字面に漂っているが、同時に皇室にたいする尊崇の念もこの上なく深厚なものである。また、文頭（能久親王）と文中（御身寄）に各尊称の一字を擡頭するなど、まことに用意周到で、これは当時の普遍的な国民感情を遺憾なく発揮したものと言うことができよう。[16]

ところで、ここで本題に立ちかえり、今一つ言っておかねばならないのは定謨伯と浦屋寛制との関係である。これはもちろん旧時に遡れば主従に準ずる関係であり、もし日清戦争に関連づけて言うならば、『雲林遺稿』明治三十一年（五十九歳）の条に「旧主久松定謨公、去年乙未の夏、台湾に従軍し、事平らぎて京に帰る。今春、盛んに凱旋の讌を松山公会堂に開く。寛亦た席末に班し、恭しく一詩を賦して賀し奉る」（原文は漢文）という詩題が見える。やや時期は後れるものの、両者の関係を知るには格好の材料といってよいであろう。

註

(1) 因みに、秋山好古大将伝記刊行会発行の『秋山好古』（三七一四〇頁）によれば、将軍が明治十年、愛知県立名古屋師範学校付属小学校訓導より陸軍士官学校に入学を志願するに至った動機について、明確にこれを知ることは出来ない、としながらも一つの推測として、

その頃また松山出身の山本忠彰といふ人が名古屋鎮台の法務官を勤めてゐたが、同氏は青年や後輩を世話することを以て、終生の道楽とした程の人であるから、秋山訓導に対しても、同郷の後輩として種々面倒を見たでもあらうし、又陸軍出身を勧誘したでもあらうと思はれる。

といい、また四五五頁にも

山本氏は将軍の名古屋小学校在勤当時同地鎮台の法務官を勤め、将軍に陸軍出身を勧めた人と云はれてゐる。

といっている。但し六一一頁には、将軍自身の言として、

余は十八歳にて松山を出でたり。松山は風俗よろしからずと思へり。独学にて大阪師範学校に入り、一時愛知県に奉職せり。其後西南の役あり。戦乱永引きしを以て軍人になりて早く国内を鎮定せんとの志を懐き、士官学校に入り、爾後軍人として今日に至る。

とある。

② 〔　〕内に注記された山本は、山本忠彰ではなく別人である。

③ 谷口藍田自身も鹿島藩の権大参事を兼任したことがある（前稿小伝参照）。

④ 尚、本稿の行論に直接の関係はないが、序でに藍田と松山人との関係について付言すれば、磯崎東陽と三輪田高房がある。前者については全集巻一に「送磯崎東陽帰伊予序」があり、その中に「余の崎陽（長崎）に在るや、諸生の為めに四書、七書、左氏を講ず。松山藩医磯崎東陽、亦た余に従いて学び、質正にして勉励、日に講筵に列する者、一年一日の如し。……」（原文は漢文）とある。後者については全集巻二の「信越紀行」に、藍田が明治二十五年七月十一日、信越歴遊のため東京を出発する際、三輪田高房が前夜より来訪して別れを叙べたとあり、また同巻の「王邸日歴抄」によれば、翌二十六年八月三十日、藍田が北白川宮の招聘で熊本へ赴くため東京を出発したとき、新橋停車場にこれを見送った二十余輩の中に三輪田高房もいた。このほか二十七年一月三十日には来訪、二月三日、五月十二日には講筵に来会の記事がある。

⑤ 北白川宮能久親王（一八四七―九五）は、伏見宮邦家親王の第九王子として弘化四年二月十六日に御誕生、夙に儒仏の学を御修得になり、明治維新の際には御身を朝幕の間に処して具に艱苦を嘗められた。ついで軍事研究のため明治二年十二月渡欧。爾後ドイツ滞在前後八カ年、十年七月帰朝された。これより先、明治五年三月、御弟北白川宮智成親王が薨去されたが、その遺言に基づき勅命により親王が入ってその跡を相続された。帰朝後は陸軍戸山学校に入学、十二年一月歩兵中佐に任官（滞欧中、明治七年陸軍少佐に任官）、爾後累進して二十五年十二月中将に進み、第六、第四両師団長を経て二十八年一月、近衛師団長に補せられた（近衛師団長時代の御事跡については後述の本文参照）。親王は、恭謙温雅、またよく世事に通ぜられ、夙に世の信望を一身に担われ、随って平生民間における諸種の団体をも御援助になり、東京地学協会会長、第二回内国博覧会総裁、ドイツ学協会会長、アジヤ協会名誉会頭等の公職を兼ねらるるところ頗る多かった（平凡社『日本人名大事典』、同『大百科事典』、藍田先生全集巻一、能久親王墓誌銘　参照）。

⑥ 久松定謨（一八六七―一九四三、慶応三―昭和一八）は旧松山藩主（実際は旧藩主定昭の養子）。

⑦ 澳底は、一に洩底に作る（『能久親王事跡』一六六頁参照）。

⑧『能久親王事跡』（二五五頁）には、

轎に載せまゐらすべきにあらずとて、竹四本を結びて長方形になし、これに竹席を張り、藁を敷き、毛布を展べ、上に竹を架して浅葱色の木綿布を覆ひて、日を遮るやうに補理ひ、これに載せまつりて土人に舁がせ、午前七時湾裡を立ちぬ。

とある。

⑨ 但し、『能久親王事跡』（二五七頁）には、

新に選び定めたる家に移らせ給ふ。宮の居させ給ふは、半ば床板を張り、半ば直土のままなる畳四枚ばかりを敷きつべき室なり。幅三尺の窓に玻璃戸を立つ。藤の臥床一つ求め得て、宮を寝させまつる。

とある。

⑩ 明治以後、特旨によって国葬が行われた例は二〇名あり（このほか吉田茂に対し第二次大戦後初の国葬が行われた）、能久親王は岩倉具視、島津久光、三条実美、有栖川宮熾仁親王についで第五番目である。

⑪ 以上、能久親王の台湾鎮定にかかる事跡については大部分、東亜同文会内、対支功労者伝記編纂会編輯発行の『対支回顧録』上巻三一四頁、下巻七四－七五頁（樺山資紀伝付記）に拠ったが、処々、棠陰会編纂の『能久親王事跡』中の記述を以てこれに代え、ほかに平凡社『アジア歴史事典』、同『大百科事典』中の記事からも引用した。

因みに、後年、台北の剣潭山腹に親王の英霊を奉祀して官幣大社台湾神社と称し、また、台南の御遺跡には台南神社を奉建して官幣中社に列せられた（『対支回顧録』下巻七五頁）。

⑫ 元来、墓誌は死者の事跡を後世に伝えるために、金石に記して墓側に埋めるもので、『能久親王事跡』（二六七－八頁）に、

（二十八年十一月十一日）御柩を埋みまつる。墓穴は石もて畳み成せり。深さ一丈余、幅八尺、長さ二間なり。御柩をば参児を塗りたる上箱に納め、川田剛が撰び、西尾為忠が書きし墓誌銘を、長さ三尺、幅二尺、厚さ三分の銅板に鐫らせたるを添へて卸しまつり、周匝をば木炭をもて填みまつりぬ。さて土を盛り墓標を立てつ。

とあるのがこれである。谷口藍田の起草したものは「墓誌銘」とはあるが実際は墓碑銘で、墓碑の碑陰に刻したものであろう。すなわち右同書（二七〇頁）に、

（二十九年）十一月四日、豊島岡の墓成りぬ。高さ一丈六尺の伊予の自然石に、近衛師団長陸軍大将大勲位功三級能久親王墓と刻せり。彰仁親王書かせ給ひぬ。

とあるのがこれである。

⑬ 東京偕行社内棠陰会編纂（代表者　森林太郎）、明治四十一年　東京、春陽堂発売。

⑭ 因みに、定謨伯の夫人貞子は島津家の出で、久光の孫に当たる。

⑮ 講談社版『子規全集』第十八巻　書簡一　所収。

(16) 因みに、大正中期より昭和初期にかけての国定教科書『尋常小学修身書』巻四は、「第一　明治天皇」「第二　能久親王」「第三　靖国神社」となっており、筆者もこれを使用した。

（特別寄稿）（会員）（奈良市右京三丁目16－10在住）

（32頁よりつづく）

また、子規自身もひそかに反省し自覚するところがあった。「筆まかせ」の掲載の順序にそれをあげてみよう。明治二十二年から翌年にかけての随筆に多く見られる。

第一編の「器械的人間」（九四）の所説は、人間は意志によって行いを左右することができるのであって器械ではない、ところが、他人を冷笑し軽蔑し、人の揚げ足を取り、あるいは頭ごなしにするくせが自分にもあって、友から忠告を受けてもなかなかおらない、これは器械的運動である。なぜなら、人が自分を厚遇するときは自分もまた彼を厚遇し、人が自分を冷笑するときは自分も彼を冷笑するからである、人が自分を撲っても自分は笑ってこれを受け、怨に報いるに恩をもってしてこそはじめて人間というべきである、「あさましの我身や、うたての凡夫や」と深い反省が見える。

第二に「話しずき」（一〇九）に伴う欠陥である。自分はとかく話しずきで、いらぬことまで人に誇らしげに話すので人の嫌悪を生ずることが多い。しかし、学問上の話はしゃべって後に益あることが度々である。考えたことを口に出さなければそれだけにとどまって進歩がない。そのことを口に出して思いついたありったけの理窟を並べてしまうと、その時また一歩進んで道理を明かにすることが多く、時として名言をはくこともあると言っている。

第三に、子規がたびたび試みた「人物評論」（一一六）について次のように言う。自分はことに人物を評論することを好み、郷里の人物を評したこともあるし、又、学生同士で互いに評し合ったこともある。世の中にはこれを嫌う者があるけれども、これは狡猾なる者、不正直なる者、卑怯なる者が悪口を嫌うだけであるから憫笑の至りである。「余は評論に於て人をほめるよりも寧ろ人をそしることを好む者也、人にほめらるゝよりも寧ろ人にそしらるゝことを好む者也」。賞められて奮発することもあるけれど、かえって自負高慢の心を生じてよくない。悪口が適中するのはよいことで、改心させるようになるのはよいことである。「余は友人とうちよりての話にも、同郷人同学生の性質、学問抔の批評を通例とす」と言っている。人を賞めるよりも人をそしることを好むのは子規もわれわれも同じであるけれども、人にほめられるよりはむしろ人にそしられることを好むと言うところ、子規の人物は凡人より一段上である。

子規が喀血して病牀につくと友だちは続々と見舞いに来てくれた。親しい者はいうまでもないが、日ごろあまり交際してない者まで何くれと慰めてくれた。世の友は利を見ては就き、利が尽きると離れるのが通例であるのに、このようにまでいたわってくれた真心に感涙を流した。今迄はあの人はひどくきらいだから交際すまいと思った人が、自分の病気を何かと心配してくれたので慚愧に堪えなかった。（以下25頁下段につづく）

子規など文人たちと久万

―涓涓集から―

和田　正

久万は、俳諧の上からは、文雅的不毛の地ではなかったと思う。それを物語るものとして、芭蕉没後五十年忌（寛保三年十月十三日）を期し、菅生山大宝寺境内に魁（さきがけ）の芭蕉塚を建立している。当時、全国で建てられたのは約五十基といわれるが、伊予では供養塔的な意味もこめて二基が造立された事は周知の通りである。

久万大宝寺　霜夜塚
松山太山寺　柳　塚

大宝寺の霜夜塚は、久万の俳諧を指導したといわれる松山の小倉志山が発企人となり、芭蕉を敬慕する久万の俳人達の後援と、寛保元年の久万山百姓逃散を、松山藩の懇願によって無事鎮めた大宝寺斉秀和尚（俳号非石）の存在を見逃すことはできない。また翌年の延享元年（一七四四）には、俳書『霜夜塚』を京の俳諧書林井筒屋から出版した。まだ松山には版元がなかったものと思われる。

その八十四句中には、諸国の俳人、松山の一流の俳人、久万の俳人が名を連ねて、正風（しょうふう）（芭蕉の俳風、門流の事か）の俳書としては県下で一番古いものだと言われている。

それから八年後の宝暦元年（一七五一）には、久万の俳老であった佐伯寿風の追善のため、『十夜の霜』を出版した。京都いつゝや板の同書には、久万連中と、江戸の人、京・伊勢の人、松山の二十四名、大洲・内子・郡中など多くの俳人の名がみられる。この中には、寛延元年（一七四八）芭蕉の遺骸のある「義仲寺」に入って、無名庵、幻住庵を再興し、諸国を行脚、俳書数冊も著わした雲裡坊という俳人の句ものっている。

さて、多数の文人墨客たちが土佐往還の途中に久万に逗留、或いは久万山郷を訪ねた人々の中に、文人達のメーンコースになったのは大宝寺と岩屋寺参詣であった。大宝寺奥ノ院（菅生の岩屋）は、宗教的な霊力と、奇厳奇勝に魅せられたが、わけても聖地・霊域として崇められ、修験道場として世に知られていた。『霜夜塚』の叙文（志山）にも「……そも菅生山は四州八十八の霊場の中にも無双の旧地なり、杉並の奥に道を続けては五十町とや、巌屋の卒都婆は大師の法力をあらわし、二十一の階子は片岨にかかり、あるは仙人の印有、仏法鳥は卯の花の比に啼て高野山に等しきとす。誠に不思議を算ふるには風景を賞するにあたわし」とあって、岩屋寺を探ねた文人たちは、「旅には宗教が存在する」ことを実感したのではな

いだろうか。

○一遍上人参籠

文永九年（一二七二）

正応元年（一二八八）

正安元年（一二九九）＝聖戒の詞書に、円伊（絵師）が岩屋を描く。

○『義経記』はフィクションの世界であるが、我国の壮大な戦記文学といわれるこの義経記に岩屋寺が載っている。全八巻中の巻ノ三の「弁慶山門を出るの事」に、「焼山、つるぎの峰を拝みて、讃岐の志度の道場、伊予の菅生（注釈・菅生山奥ノ院）に出でて、土佐の播多まで拝みけり」とあって、四国八十八ケ所成立以前の古態、即ち山林修業、山岳信仰、山内に白山・熊野信仰・胎内くぐりの行場などがあった事が知られる。

○能筆家＝明月上人「岩屋寺詩文」、久万町立美術館蔵。

○紀行家＝俳人大淀三千風、貞享二年六月。

○四国遍路記各種、江戸時代。

○画人画家●一遍聖絵●遍路記絵図

●大西黙堂画●久万山絵図（遠藤広実筆）久万町立美術館蔵

●江戸時代木版画二枚（慶応大学図書館蔵）

○民俗探訪＝並河天民「近世畸人伝」

○儒学者・漢学者＝日下伯巌ほか。

○近代画家＝水墨画　坂田虎一

水彩画　浜田泰介

○俳遍路＝中野三充「三充句拾遺・俳遍路」

斉藤知白「俳諧行脚お遍陋さん」

伊藤牛歩

◇　◇　◇

久万山郷の江戸中期・後期から、明治・大正・昭和へとつづく、俳諧（俳句）の素地と、子規など文人たちが旅心をかき立てた岩屋寺について、幾つかの例を挙げたが、つづいて安倍能成著『涓涓集』に登場する久万と縁りのある文人について述べてみたい。

正岡子規

安倍能成が子規に関して、「我が生ひ立ち」に、「子規の叔父大原恒徳の宅で夏休で帰って来て居る子規に逢ったこともあるが、大学生の子規には小学生の私など眼中になかったろう、因よりその時も子規を尋ねるなどといふ気にならなかった」。

また『涓涓集』には、「俳句にも短歌にも関心の薄かった私は、……始めて子規に感動したのは、大正七年に岩波書店で、原型をほとんどそのまゝに復刻した《仰臥漫録》を見てからである。その毎日の食事に鮪幾切とか牛肉いくらとかいふ断片にも、子規の旺盛な不屈の生命力が、あの苦痛に充ちた貧しい闘病生活の中に漲ってゐることを直感して、頭の下る思ひを深くしたのであった。爾来松山が子規を生んだことを、郷土の最上の誇としてゐる」と感嘆の言葉を述べている。

詩文に熱中していた頃の子規らは、山水画を習っていた。その画

の中の仙境に遊んで詩藻を養っていたといわれる。その様な景色の佳いところに遊びに行こうという話になって「岩屋山」を選んだ。また大田正躬談によると、久万山西明神村の旧庄屋の息子である梅木修吉が案内しようと申し出た事も一因であった。修吉は、後の明治十六年三月、子規ら十八名と上京記念写真を撮っている。

○第一次久万・岩屋山旅行

旧土佐街道、明治十四年、十五歳

正岡　子規

竹村　鍛（碧梧桐の兄）（松窓、黄塔）

大田　正躬（柴州）

三並　良（松友）

七月三十一日発、久万泊、八月一日帰宅

○第二次久万・岩屋山旅行

四国新道、明治二十三年、二十四歳

正岡　子規

藤野　潔（古白）

大原

歌原　恒（蒼苔）

八月十八日発、久万泊、十九日竹谷泊、二十日参詣、久万泊、二十一日帰宅。

病身であった子規が、二度までも岩屋行をしたという事は、子規の『筆まかせ』にもあるように、もともと南画的憧れがあり、画に熱心で、為山も賞めている程、上手で画家として身を立てるほどの才能があったから、岩屋の風光をみる眼も違っていたと思われる。

それに、子規にとっては第一次の岩屋行が初めての旅で、文人的趣味に奔った頃、絵仲間と「いつも此のような深山幽谷の地に住みたいものだ」と語り合い、それを理想に描いていたというから、神秘的な岩屋の印象は心に鮮かで目に麗わしく、東都に在っても、心象風景として心の奥深くとどめていたのではないだろうか。

第一次登山は、荏原・久谷を経て三坂越の土佐街道（久万街道・松山街道とも呼ぶ）を徒歩で、久万の橋本屋に一泊した。この宿は後に大野医院となり、元は江戸期に郡医をつとめた岡本氏の自邸という説もあるが確証は得ていない。なお、橋本屋は対岸に移り主の橋本屋長左衛門の二字をとり橋長旅館とよんだ。

二度目の登山は、関新平知事の英断により、五ケ年継続事業で着工した予土横断道路の愛媛県分、すなわち立花口・森松・砥部・三坂峠・久万を経て高知県境に至るもので、明治二十年十二月七日付の「海南新聞」に、「……官吏等は車にて往来なし居れり、また三坂以南は目下開鑿中なるが……」とあり、子規らはこの新道を辿った。新道は『久万町誌』によると、「明治二十五年八月、予土横断道路愛媛県担当区竣工し、勝間田知事・桧垣郡長・関係者多数出席、三坂峠で完工式行われる」と記している（四国新道のうち予土横断道路）。

なお、二度目の登山のとき竹谷（現美川村）にも一泊しているが、中原の宿は現存する。岩屋寺は、子規参詣後の明治三十一年、大火で、仁王門と虚空蔵だけを残し、惜しくも諸堂・仏具・記録類を悉

く焼失した。

藤野漸・潔　藤野漸は、明治四年八月当時、久万租税課出張所権大属で、久万山・久米騒動に遭遇した。蹶起した郷民は三千人に達し、ますます増加する勢いをみせた。藤野ら出張員と、応援のため駈けつけた大参事鈴木重遠（旧藩の家老）、長屋忠明、数人の県属官の説諭をふりきって、遂に強訴のため三坂を下った。この時、野間曳柳の父大作（士族、号一雲、鶯居門の宗匠もつとめた）も久万会所勤めであった。明治三年久万山代官所も廃止となり、庄屋の役所である久万山会所も、維新後は大区の会所、取締の番人（警察）の屯所となったから、野間大作も県官の役目をもって久万に駐在していたのであろう。

藤野漸は、もと久万山代官を勤め、岩村高俊が地方長官に赴任（明治十年）すると、県属官で最も信頼されて各要職をこなし、岩村長官が中央政府に還ると本省にひき抜かれた人物であった。後に第五十二銀行頭取となり、宝生流謡曲の大家でもあった。

潔は、藤野漸の子で、子規の従弟である。明治四年八月八日に久万で生まれた。通称を久万夫、久万山・久米騒動のとき生後六日目であった。俳号は古白。

長じて早稲田に学び、同級生に島村抱月・後藤宙外がおり、古白は少し狂的な天才肌であったという。子規は「古白は他人と調和ができず」と嘆き、古白に意見をする事もあった。上京後も喧嘩が絶え止まなかった。

明治二十二年、神経病が嵩じて巣鴨病院に入院したが、同二十三年、子規の第二次岩屋山旅行に加わり、久万地方に遊んだ。幾つかの山坂をこえて、山峡の別天地と、絵を見るような岩屋の景観に我を忘れて、静寂の世界に浸り、生気を得たのではないだろうか。

そして二十四年の秋、「秋海棠朽木の露に咲きにけり」の句で、子規から、「明治俳句会の啓明と目すべきなり……」と、激賞される程、新境地をひらいたが、明治二十八年四月七日、古白はピストル自殺。子規はその死を悼んで次の句をよんだ。

春や昔古白といへる男あり

我死なで汝生きもせで秋の風

春風のわれまぼろしに近き身ぞ

なお、古白の異母弟の準は、安倍能成の竹馬の友であったという。

柳宗悦　日本民芸運動創始者の柳宗悦は昭和三十年に岩屋寺を訪れた。低部にもバーナード・リーチと同道して資料を収集している。

「民芸」という言葉を生んだ柳は、昭和十一年大原孫三郎の援助を得て、東京駒場に日本民芸館を開設した。柳は、日本全土の雑器の美、実用品の中の美、下手もの（普段使い）の美を発見し、単なる収集家に終らないで、無名職人の手工芸、手仕事の国日本の、調査と研究に情熱を注いで、民芸学を樹立した功績は大きい。ブルノー・タウトも、柳のものを見る目の確かさを其の著書で賞讃している。朝鮮芸術にも刮目して朝鮮民族美術館建設にも働いた。また琉球の美を世に紹介した。

一遍上人に心惹かれては、一遍研究にうちこみ、全著作中の最大

傑作という『南無阿弥陀仏』を著した。

大正十三年に木喰仏との出会いから、その不思議な微笑みに誘われ、木喰上人の日本廻国修業地（四国調査は大正十四年）を追跡する。木喰上人は、四国回国数度、剣山・石鎚山でも修業し、道後の湯が大好きだったという。木喰は、晩年に四国八十八ケ所の仏像を刻み、出生地の甲州西八代郡丸畑に四国堂を建立している。

終戦後、学習院は私学となり、再建に向けて、院長安倍能成の苦労は並大低のものではなかった。東大・京大・慶応・早稲田と並ぶ有力な卒業生を出している学習院も、混迷した時局、斜陽族も少なくなかったであろうと思われる。安倍院長はOBを頼みにして、柳宗悦にも寄附金を仰いだが断わられた。

その事を柳の同級である長与善郎にこぼすと、「そりゃ駄目だよ、昔から花は緑、柳はくれないと云うぢゃないですか」と冗談をとばした。「花は紅、柳は緑」を捩って、「柳はくれない」と軽く言ったが、安倍院長は心から笑う気にはなれなかったと思う。

しかし、安倍能成は、柳宗悦の死を惜しんで次のように述べている。「私は柳君とは育ちも違っており、その自己中心的で貴族的だと考えていた性格（彼の）は親しめなかった。他人のことを顧慮せず、自分の趣味好尚志向を大胆に主張して憚らない君が、自然から生まれ出たやうな民俗品の美しさを認識して、価の高い骨董品や不当な価値をつける茶器に反抗し、その結果、いわゆる民芸品の価格を高めるに至ったのも、君の真の力であると思ふ。……中国と比べて意志的な精刻を欠き、日本人と比べてほ繊細な感覚に乏しい朝鮮人自身にも今まで省みられなかった朝鮮工芸の価値を認識させる力を持ち、その功績は顕著なものがある。……柳君のように我がまゝで自分に随順する者か自分を尊敬する者かでなければ容れられぬ人物にとって、朝鮮の工芸を通じて朝鮮と朝鮮人とを愛し得るのは幸福だったといへるかも知れない。……日本の地方的な民芸に息吹きを与へ、多くの追随者を得て、独特な民芸ブームを起こした」と。

柳は「心偈」を残している。三十一文字の短歌、十七字の俳句より更に煮つめた十字前後の詩から、東洋的な心を伝えたいと柳が自ら名付けた小偈を、二つばかりのせたい。

○蕗ノタウホ　エム　雪ニモ　メゲデ

人生には時として深い雪の下に埋れる時がある。深い雪の下から、雪の衣を払って擡げほゝえみかける蕗の薹。

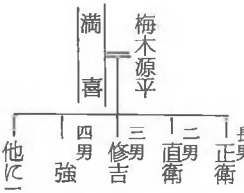
○冬　キビシ　春ヲ含ミテ

冬の烈しさは、春の訪れと暖かな季節の到来を孕んでいる。冬の厳しさに堪え忍び、春への望みを抱こう。この真理を悟れば、寒さの中にもぬくもりがある。

極堂

柳原極堂の母方のおば（母の妹）満喜が、久万山西明神村庄屋梅木源平に嫁いだ縁から、極堂は中学時代に三坂をこえて梅木家に遊びに行き、三上是庵門、斉院敬和師の久万学舎をたずねた事もあった。

極堂は、明治十六年に上京、遊学中に叔父の梅木源平より葉書をもらって日本橋の旅館を尋ねた事があった。叔父が滞在している理由は、予土横断道路もほぼ完成に近づいたころ、工費不足のため、



県官と、郡民代表の梅木・佐伯・二宮の三氏が政府に陳情する目的であった事などを書き残し、隠れた郷土史の一片となっている。

他に久万との関係は、久万東明神村出身で後に三菱財閥の理事長となった船田一雄が、東京帝大生であった頃、「東京通信」を海南新聞主筆の極堂のもとに送って学費をかせいでいた事、岩屋寺の子規の句碑「夏山や四十五番は岩屋寺」を揮毫、昭和八年、霜夜塚の建直しと墨入れを機に句会「霜夜会」がうまれ、納涼句会の撰者（池内たかし・久野助次郎・越智村雨・酒井黙禅・森薫花壇・篠崎可志久・矢野藍女・柳原極堂）に名をつらねている。また野間曳柳らと結成した松風会当時、久万に出向いて俳句の指導をしていたとも伝えられている。

碧梧桐

昭和五十五年十一月二十三日、古岩屋に碧梧桐の句碑が建立された。

一軒家も過ぎ落葉する風のまゝに行く

この句について、平成七年十一月の愛媛新聞「季のうた」に、村上護氏が次のように解している。「子規の二大弟子で虚子と併称されたが、のちには俳句の名を捨て短詩とよんだ。そして季題の規約も不合理と超越してしまう。そのころの作で〈落葉〉を季語としては使っていない。季節感を無視する態度ではなく、北寄りの風の中をあるいて行く作者を髣髴させる。一軒家を過ぎれば、人里から離れてしまう。そんな野道を一人ゆくわびしさは、彼の人生でもあった」。

寂寥感が漂う此の句は、碧が大正十三年十一月、松山に帰省していたとき古岩屋、岩屋寺を探勝したときの作である。久万高原の晩秋の風は冷たい。その風に吹かれながら、碧が遍路道を歩いていたとき、古岩屋の八丁坂という少しばかりの難所にさしかかる手前に、ポツンと一軒家があった。そのおりの作句を下畑野川河合という集落に打ちもどった碧梧桐は、村長の求めで、したため残した。碧は同じ集落の別人の請いで「双六の下の用ある手紙」も書いた。なお、前句は中学生の参考書にものせられた。

松根東洋城

『涓涓集』に、「……君は大正八年に宮内省をやめて後は、終生宮仕せず、一時国民新聞の俳壇を担当したが、その後は専ら大正四年創刊の雑誌「渋柿」を通じて、俳諧の道者としては偏に俳諧に生きるようになった。君が終始尊敬していたのは、故人では芭蕉、今人では漱石、寅彦（寺田）に止まって居たようである。……君は私と同県の宇和島生れであったが、日本人も伊予人も今なお尊敬し崇拝して居る正岡子規にも殆んど目もくれなかった。高浜虚子とも国民新聞俳壇担当の頃は親しかったようだが、間もなく絶交の姿になって居た」。

このあたりの事情を『子規と周辺の人々』は、「……明治四十年になると、東洋城は写生一本の世論にあきたらず「子規から芭蕉」への還元を説くようになった。折りふし「国民俳壇」の選をしていた虚子は、小説に専念するため東洋城に選者を譲った。……たまたま大正五年、俳句に復活した虚子は東洋城に無断で国民俳壇の選を取りもどした。そこには複雑な事情もあったと思われるが、以後二人の間は絶縁となり、ホトトギスともわかれて、東洋城は芭蕉を宗とする俳諧の道を探究することに専念したのである」と述べている。

東洋城と虚子、また子規門下の双璧と称され、安倍能成から「両雄並び立たず」と評された虚子と碧梧桐は互いに対立し、袂を分つようになる。虚と碧の対立が頂点に達した頃であろうか、野上豊一郎の前で、虚子が、碧梧桐に向かって、「謡はお前の方がうまいけれども、その他の点においてはお前に負けるものは一つもない」と、かなり激しい言葉を吐いたということである。

ともあれ、東洋城・山頭火・巌谷小波の句碑が美川村御三戸に建立され、今年三月二十八日除幕した。東洋城の句は、

頻る雪　崖も御三戸もなかりけり

安倍能成

自叙伝には、父君の義任は元治二年（一八六五）七月から、三年間久万で町医をし、明神の船田庄屋へも往診していたが、いつ久万を去ったのかは定かでないとある。

中学時代から文部大臣（講演、揮毫など）までの、安倍能成と久万との交流も少なくはない。その一例として、中学三年の修学旅行（遠足か）で、岩屋寺に参拝した。その思い出の記に、「八十八ケ所の一つの、久万町の近くにある岩屋寺に参った時、どうしてこんな岩ばかりの所に、こんな立派なお寺が建てられているのかと不思議に思った」とある。

これらを含めて、『久万往還人物記』㉜で安倍能成、㉒では柳原極堂を詳述しているので本誌では省きたい。

前述のように、安倍能成と子規との交わりは年令の大差もあってほとんどなかったが、父義任が松山の町医者当時、十三、四才頃の子規はコレラに罹り、治してもらったので礼状を送った。能成は「大腸カタルくらゐだったのかも知れない」と謙遜気味に語っている。その書簡には、「明治十三年の春を迎え、余偶感する所ありて謹で愚簡を草して安倍国手に呈す……」と、前年にうけた治療の御礼状の手紙で、中学に入ったばかりの少年が、「国手」とは驚かされる。

漢詩の素養もさる事ながら、明治十三年松山中学に入学、秋の大試験の優秀者に選ばれて、頼山陽選『謝選拾遺』を賞として受けるが、難解なので友と河東静渓の門を叩いた。西明神村の梅木少年もこれに加わる。この意欲と、各分野への探究と挑戦、それに旺盛な探索心が、語・句や、詩渓、表現力を豊かにし、天分の才能が加わって子規文学の下地になったのであろう。

（平成八年三月例会講演）（会員）（上浮穴郡久万町宮之前）

子規と盲天外

今村　威

明治四十（一九〇七）年十一月二十三日、松山市二番町（現在の向井内科のあたり）に設立された私立愛媛盲唖学校の開校式が行われた。盲天外森恒太郎（一八六四～一九三四）が、永年その設立に奔走し、この年の一月には、盲唖学校設立発起人会評議員となって努力したのが実を結んだのである。

その様子は、十一月十六日付の「海南新聞」に「涙の開校式」という見出しで詳しく報じられている。記事は、開校式が涙に終始したことを述べた後、

「一度は涙が乾いて居たのだが、茶菓の饗応が始まって、彼の盲天外森恒太郎氏が為せしテーブルスピーチは、再び会衆をして流涕を禁じ得ざらしめた。氏は先ず

私は先刻一寸御挨拶が申し上げたかったのですが、式を見るに及び、嬉しさの余り感極まって言葉が出なんだのです。今ここにお茶を頂いて、漸く心臓の鼓動が鎮まりかけたから、聊か我々不幸者に対する諸君の御同情を謝し、併せて更に進んで、博愛に富まる諸君に訴へたいことがあるのです。

との前提を置き、盲兼唖にして勉学励精の結果、数ケ国の語に通じ、然も世界の大哲学者と言わるるに至りし米国婦人ヘレンケラーの事より説き起こし、

我々不具者は、しばしば常人の想像し能はざる不便を感ずる上に、その不便不自由以外、社会よりある制限を附せらるることは、実に心外千万である。その制限とは、我々の眼が見えぬとか、耳が聞こえぬとか、乃至は物が言へぬとかいふ、その不具の点なる以外に、絶対に無能力者視せられ、社会より圧迫さるる、この一事なのである。

とてその実例を挙げ、

私が十年以前、余土村の村長に選挙せられ、規定によつて県庁へ認可申請をしたときに、県庁は、字も読めぬものを村長にしたとて、それこそ真に盲判を捺すだけの事で、決してその職務を執行することは出来ぬからとの理由で、これに不認可を与へた。私は何も村長になりたいことはないが、後世盲人のため、これは是非とも争はねばならぬ問題であると思ひ、藤野政高氏等にも頼み、私も県庁に出頭して極力争ふた結果、ヤットその認可を得たのです。この時藤野政高氏等の助力と、私の熱心なる主張とがなかつ

たならば、後世盲人は、実に絶対不能力者として当然享受すべき人権をさへ奪はれ、帝国臣民としての責任をも尽すことが出来なかつたのかも知れぬ。

と叫んだときは、如何に満場の同情を惹いたであろう。余はモー顔を上げて、満場を一瞥するの勇気はなかつた。後で聞けば、赤松甲一郎氏の如きは、流涕滂沱たるものがあつたといふことだ。」

と記している。（原文の仮名遣いはそのままとし、漢字は常用漢字に改め、句読点を補った。）

この演説からもうかがうことができるように、彼が、失明前に改進党を起こして県会議員となって活躍したのも、失明後、余土村村長となって同村を日本一の模範村に育てあげ、さらに、愛媛盲唖学校の設立に努めたのも、自由民権思想に基づくものであった。盲天外は、この後間もなく余土村村長を辞したが、その後もこの思想を貫いて、道後に公民義塾ともいうべき「天心園」を創設して社会教化に努め、さらに道後町長となって財政の建て直しに当たった。

森恒太郎が、彼の生涯を貫く自由民権思想に目覚めたのは、彼が十三歳の明治九（一八七六）年、愛媛県変則中学北予学校（明治十一年愛媛県松山中学校となる）に入学し、校長草間時福の教育を受けたためである。草間は、慶応義塾の俊才であったが、愛媛県権令岩村高俊および宇和島出身で当時「東京曙新聞」「朝野新聞」の主筆であった自由民権家末広鉄腸のすすめにより、明治八（一八七五）年、二十二歳で県立松山英学所（北予学校の前身）所長となった人物である。彼は、自由民権思想をもって教育に当たり、月に二、三回は明教館講堂で演説会や討論会を開催した。明治十二年草間が東京に帰ると、彼を慕って退学して上京する者が相次ぎ、草間の居た明治十二年七月には二一三名いた生徒が、翌年七月には一一四名にまでに半減（「子規博だより」十五巻四号八ページ）したという。恒太郎もそうした退学者の一人で、明治十四（一八八一）年十八歳で上京し、小石川の中村敬宇の私塾同人社本科に入学している。

一方、正岡子規も、明治十三年自由民権思想にあこがれて松山中学に入学する。松山中学三級生の明治十五年九月、子規ら松山中学生徒多数が、授業を抜け出して臨時県会を傍聴したが、子規はこの後、演説に興味を持ち、政治への関心を高めていった。この年の十二月には、柳原正之（極堂）らと独立社を結成し、「自由民権雑誌」の発行を企画したが、結局これは中止となった。この月北予青年演説会で、「自由何クニカアル」と題して演説している。この頃子規は、夜、城山や寺で演説の稽古をし、松山中学の教師から注意を受けたほどであった。

しかしながら、草間時福が去った後の松山中学は、革新的な自由民権思想による教育を押さえつける気風が強くなり、明治十三年、権令が保守的な関新平に替ってからは、いっそう排斥されるようになった。明治十六年一月十四日、明教館における北予青年演説会で子規は、「天将ニ黒塊（国会）ヲ現サントス」と題して演説し、教師に中止を命じられて注意を受けることとなった。子規はいよいよ東京遊学の希望を強め、その年の五月、「松山中学只虚名」に始まる七言律詩を作って松山中学退学を決意する。そして六月、叔父加

藤拓川の上京許可の書簡を得て、直ちに退学して上京した。このように自由民権思想を根底に持って、その後の生涯を生きてゆくのである。

森恒太郎は、明治十九（一八八六）年帰省し、九月石手川の氾濫の対策のため、村代表となって活躍したのを手初めに、政界に入ってゆく。以後、南予鉄道（郡中線）創立発起人、改進党を起こして県下遊説、予讃新報社創立、伊予肥料会社創立発起人、温泉郡選出県会議員、松山紡績株式会社設立発起人というように政治に熱中していった。

その多忙の間に、恒太郎は、俳諧の改革を志して、明治二十四年八月十日、俳誌「はせを影」を発刊し始める。彼はすでに、明治十九年、一日庵土岐古の門に入り、孤鶴と号していた。第一号の巻頭「はせを影発刊の趣意」には、次のように記されている。（文中括弧の注は筆者による。また句読点もなるべく今日のものに近づけて改めた。）

僅かに十七字をもて能く宇宙の真美真情を籠絡（ひとまとめに）し、詩学上いとも尊信すべき高大なる気格、霊妙なる観念を以て風姿と余情の綽々（ゆったり）たるものあるは俳諧にこそ待れ。故に俳諧は文学の幽玄なりとの説ある、蓋し此をもて言ふなるべし。

俳諧の我邦に行はるること、久しくかつ洽し。然れども近ごろ風格の卑野に流るるものありて、ともすれば文学界に疎ぜられんとす。是れ俳諧の卑野なるにあらず、俳諧をなすものの卑野なるがため、俳諧を疎ぜらるるは嘆かはしきことにこそある。

此において同好の士と共にこの悪弊を除き去り、純良に俳道の研磨を積み、幽玄なる俳諧の光輝を発揚せしめんと欲す。而して我がはせを影が慕ふ所のものは正風に外ならず。正風は俳諧中興の開祖たる芭蕉翁桃青の遺遺にして、今日文学の神髄に恰当（合致）するものとこそ言ふべかれ。よって此道に背くものは我が文学の敵、此道に同ずるものは我が文学の好侶伴なり。はせを影は此道の拡張を図り好侶伴の多からんことを期すると同時に、我が文学の敵に於ては縦横打破し一も仮すあるなく、常に芭蕉翁の風格を慕ひ、翁の正風をしてこのはせを影に幻影せしめんことを勉むるのみ。さればにや、題名をはせを影とは称したり。（以下略）

明治三十年の「ほととぎす」創刊に先立つこと六年、その先見性に驚かされるが、その主張は、「芭蕉に帰れ」に要約されるものであろう。しかし第二号の巻頭言「汎く風交を求むべし」（明治二十四年九月五日）では、恒太郎のもつ自由の気風と政治性がうかがわれて興味深い。まず彼は世界的視野から文学を論じてゆく。

国に東西の区別あれど、文学の思想に区別あるまじ。欧州、支那、日本と、各国文学の趣味を異にするが如く見ゆるも、是れは文詞調格の差異あればのことなるべし。自然の微妙を穿ち、人情の真美を写さむことはまさにその轍を一にすべく、決して洋の東西をもて軒輊（上下高低）あるべからず。さればにや近来欧州文学界に於ても、遠からずして全世界の文学は相一致するに至るべしと論ずる聖（ゲーテのことか）あるに至りたりと聞きぬ。

「自然の微妙を穿ち、人情の真美を写さむ」には、後の子規の「写

生論」に通うものがあるように思われる。続けて彼は、

さるからに文学の一部なる詩歌に至りては勿論のこと、ポエジーも、唐詩も、和歌も俳諧も、その調格に於いて各異なるあれど、詩情に於いては毫もことなふ所あるべからず。おのおの自然の妙、人情の美を発揚せんことを勗むるをもて本体とはなせばなり。唐詩、和歌、俳諧の如く、別に一格式を立つるものに於いてさへ詩情は一なり。況んや同じ俳諧たるに於いてをや。

と述べて、この考えに基づいて県下の現状を次のように批判する。

我が県下の現況を見渡すに、地方割拠主義の俳人多し。各郡村十数名の俳友は一小会を設け、或いは月次会を催し、中には雑誌様のものを発刊するさへ数知れぬ有様なり。而して彼等は一も汎く風交を求むることを為さず、専ら封建的の臭味を帯びたり。彼等は汎く風雅を闘はすことを以て楽しとせず、郷党小数のものを集め僅かに点取りの競走をなせり。彼等は是れを以て楽しみとし、小数の間に点取りの競争をなして、己れ天狗たらんことを欲す。此に於いて益す封建的の割拠主義を脱絆することを得ず。そして、「此を以て予は熱心に俳道を楽しまんと欲するものは、汎く風交を求めんことを勧誘す。」と、県下の俳諧愛好者の大同団結を呼び掛けている。

恒太郎は、この論で「唐詩も俳諧も詩情は一なり。」と述べているのを実証するかのように、「はせを影」の第二号と第七号（明治二十五年三月）に、「唐詩雑詠」と題して転和吟を試みている。参考にその一部を引用してみると、（最初のみ第二号）

挙頭望山月　低頭思故郷
月しろや峰のさをしかなぜなかぬ

白髪三千丈　縁愁似個長
はな守やかぜ又あめに身の労れ

空山不見人　但聞人語響
道つれの行くさき問はん呼子鳥

独坐幽篁裡　弾琴復長嘯
絶え絶えな琴の音ゆかし春の雨

春眠不覚暁　処々聞啼鳥
やかましう啼くや雀もはるの鳥

この「はせを影」第二号には、正岡子規が紀行文「山路の秋」を「在帝国大学　子規子」として寄稿している。後の優れた紀行文の先駆をなすものであり、恒太郎と子規の交友の程が偲ばれるので、全文紹介させていただく。（括弧は筆者の注）

そよとふく秋風に驚かされて二旬（二十日余り）の閉居に足の豆消えしことあさましく覚え仏は西へ帰り玉ひしつゝ（次）の日東の方河の内の山奥へと志しぬ　家をいづるとき

山こえていさ見にゆかんあきの秋

途中畑中村にて老松（もと小野小学校の校庭にあった与力松のこと）の下にいこふ

順礼のゆめをひやすや松のつゆ

川上より奥は山水の景色はや尋常ならず　とある絶壁の下にて

追ひつめた鵜鵠見えず渓の景

河の内の近藤氏に一夜の宿りをたのむ。山深ければさすがに秋既に多し　「夜もすがら秋風きくやうらの山」といふ曽良の名吟も折から思ひ出されて猶ほ哀れに情ふかゝり

翌朝山路あやしくたどりつく　案内の小童にひかれて路ともなく叢ともなくわけ行くに、萩、女郎花の思はすふみしかれてあとよりうらめしげに起き直りたるをかし

行き〳〵てつまる処を唐岬の瀧、其隣の谷間を白猪の瀧といふ突兀たる（高く突き出た）巌は天を衝きて銀河脚下に傾き氤氳たる（天地の気がみなぎっている）白雲は衣の袖より起りて　蛟龍乍ちに隠現す　小童の瓢をさゝげていざまゐれといふ　三杯の村酒に眼ちらつきて千山萬岳瀧の音に動き出し見ぬ世の謫仙しばらく我身をかる尊とさよ

瀧湧くや秋のはらわたちきれけん

見るが内に瀧のけしきすざましく肌をうつの冷気腹の底までこたへて坂離とらぬ身の留らんこと覚束なく一里の嶮坂を飛ぶが如くにいそぎ下りぬ　顧れは山もさけなん音ばかりは聞えて瀧の水そことも知らず　見渡す限り雲又雲鳥も通ふみちもなし

（表記は講談社版「子規全集」第十三巻小説紀行四七〇ページに従った。「銀河脚下に傾き」が李白の「望廬山瀑布（其二）」の結句「疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと」をふまえた表現だとすると、「見ぬ世の謫仙」は「見ぬ世の謫仙」（李白のこと）の誤植かと思われる。つまりこの部分は「激しい瀧の音の中で瀧を眺めていると、まるで自分が李白になったような不思議な気持ちになった。」という意であろう。発表の際の解釈を改めさせていただく。）

いずれにしても、子規が恒太郎の期待に応えるべく、漢詩の学識を駆使して綴った、小品ながらも緊張感に富む優れた紀行文である。

恒太郎（三樹堂孤鶴）の始めた「はせを影」は、第八号（明治二十五年四月五日発行）以後はどうなったか不明である。恐らくこの年の五月から、海南新聞編集に当たるようになり多忙を極めるようになったこと、政治に打ち込んでいるうちに七十町歩に及ぶ資産を使い果たし、妻とら子と離別するなど苦難が一度に押し寄せてきて、政界から引退しなければならなくなったことなどのために、廃刊のやむなきに至ったようである。

さらに苛酷な運命が恒太郎を襲う。明治二十七（一八九四）年九月、突然左眼眼底出血により失明の危機に襲われる。八方治療に手を尽したが、右眼も同様の病に犯され、明治二十九年三十三歳で両眼とも失明してしまった。当時したためられた短冊には、孤鶴から盲人孤鶴へさらには盲天外へと号が変えられている。和田茂樹会長によれば、「二十九年秋子規が秀句を選抜した『承露盤』には「盲天外」とあるので、両眼失明の二十九年頃盲天外と号するようになったのではないか」とのことである。また失明当時の盲天外の句作について、和田会長は、復刻増補版『一粒米』のあとがきに次のように述べておられる。

二十九年秋には、子規の添削をうけ、三十年の松山松風会にも度々参加しており、子規添削の句稿もかなりあったとのことであ

る。「ほととぎす」にもその句は載せられ、新派総合選句集『新俳句』にも二句選ばれている。この頃が最も俳句に熱中した時期といえよう。

失明の痛手を癒やすかのように俳句に熱中した亘天外の姿や、それをいたわり見守った子規の心が感じられる。

この頃亘天外が残した短冊に次のようなものがある。上方に小さく「壷白逝て三年　我盲て三年」と記された下に「君逝きて我三年の花を見ず　亘天外」の句が書かれている。壷白とは藤野古白（明治四～二八）のことで、彼は子規のいとこにあたる。清新な句作で子規を驚かすほどであったが、心を病み、明治二十八年四月七日ピストル自殺をはかり、十二日に死亡した。この事件は、従軍の途上宇品港にいた子規を痛撃したが、丁度明を失いかけていた亘天外にとっても大きな悲しみを与えた。「明治俳句界の啓明」と高い評価を受けていた古白に、「はせを影」を刊行して俳諧の革新を志していた亘天外は、大きな期待を寄せて交際していたわけで、自分の失明と合わせて、大きな喪失感を抱いていたことがこの句によって知られる。

「ホトトギス」六巻六号（明治三十六年一月）に、「地名読込の俳句を作る当時の状況」と題された写生文（復刻増補版『一粒米』二五九ページに再録）が載せられている。かつて目のある時代に訪れた名所や旧跡を、心象でたどりながら地名を読み込む俳句を作った体験が述べられているが、その一部を紹介したい。

次に京に往って東山西山と彷徨うて居ると、昔し鳥辺山の辺りを歩いた時に、只さへ物淋びしい所に藪が沢山あって、其の藪の中に抜け道の小路があった。随分陰気な所であったのを思い出してフト句にして見ようと考えたから無雑作に、梅が香や鳥辺野の藪の小路来て、とやったが、ハ、――目のない僕だから直ぐに香いと出掛けるとおかしかった。（中略）

泉州堺、浜寺とあるいて、いつの間にか故郷の高浜に返って来た。伊予の小富士は何うだなと考えた。すると其の傍はらの太山寺の勝地に思いが寄った。松柏の鬱蒼として居る中に寺がある。通夜堂が出来て居る。火のない冷たい茶湯釜がある。仏前の暗い燈火がなさけなさうに微光を洩らして居る。広い通夜堂の内に、順礼が通夜をして居る事を思い出した。通夜堂に順礼寒むし太山寺、も余り平凡か。というてもう草臥れ気味になった。併し久し振りで三百里の旅行をさして貰った其の間の僕の感慨趣味は、作った句の外にあるので、是は是非共出題者に謝さなければならぬのである。

「目のない僕だから直ぐに香いと出掛けるとおかしかった。」と述べているが、亘天外の作品の中でも、視覚によらず、聴覚や触覚（触察）によるものには、特に味わうべきものがある。彼は六十歳の大正十二（一九二三）年、道後に「天心園」を創立して、社会教化のために青年男女の教養を高める公民義塾や、悩みある人の相談に応ずる煩悶相談所等の事業を実践した。その資金に当てるため、彼はたすき掛けで盲筆を揮い、多くの自作の俳句半折に書き残している。そのいくつかを紹介しよう。

伊予とまうす国あたたかにいで湯わく
手ぬぐひのたきよりながしふじの花
石なげてどんぶりかちん川すゞみ
ほととぎす十戸の邑に雨のふる
芋畑で逐ふたる鹿の声遠し
折り〳〵は栗も交りてこの葉ふる
木からしや天窓にふる物のおと
うたがふて撓めて見たりかれやなぎ

また、鴻池楽斎氏記録の短冊から、

むし秋を知りわれあきをむしに聞く

この短冊には「盲人孤鶴」と記されているので、失明当時のものと思われる。

明治四十一（一九〇八）年、盲天外は東京の出版社から『一粒米』を出版する。これは、失明による絶望から、三度も死を決意したという明治三十（一八九七）年、「一粒の米が、わが身を犠牲にして人間に食べられることにより、人間の血肉はおろか精神にまで進化する」という事実に気づいたといういわゆる「一粒米の悟り」を聞き、一粒の米に励まされて、世のため人のために、無私の活動に入ってゆく過程を述べたものである。当時第一級の知識人新渡戸稲造（一八六二〜一九三三）の序を得て発売されるや、空前のベストセラーとなり、招かれて東京で演説した時には、会場の日比谷公園は、聴衆で立錐の余地もなかったと伝えられる。これほどまでに全国的共感を得た理由の第一は、盲天外の深い精神体験を内容とするところにあることは言うまでもないが、さらにその思想が、日本人の基層に流れるアニミズムによっていること、またその文体が、写生文の手法を活用した平明なものであったことも大きな理由に挙げられると思う。そのことをよく感じさせる部分を次に引用したい。

或る日の事であった。予は膳に向って食せんとする時、一粒の飯が、会々箸を離れて膝の上に落ちた。予は是を探り求めて、我が指頭に拈じて居ると、豁然として忽ち悟る処があった。夫れは僅に指頭に拈じ得られる一粒の飯にも、殆んど量るべからざる重さのある事を知った事である。

予は我が指頭に拈じつゝある一粒米に依って、我が心身は粉微塵に打ち壊されたのである。今が今まで死よ死よと憬れて、心に一片の生の影だに認めなかった予は、是に於て全然「無」となってしまった。予が指頭の一粒米は、無限の光明を放って、暗黒の境遇を照らした。（中略）

思ふに、彼の一粒米が吾人の食膳に上って、我が口腹に入り腸胃に消化せられて、血液となり、乳汁となるは、即ち一粒米の進化である。一粒米の向上である。僅に数時間、否数分間以前まで植物であった一粒米が、その進化向上に依って、忽ち吾人の肉体に上り、吾人の栄養となり、生命となるとは実に驚いたことではないか。（中略）

此の如く進化し向上すべき性質を有する一粒米が、一たび進化向上し来りては、もはや素との一粒米ではない。万物の霊長たる人とまで向上したのである。

この『一粒米』は、今日も人の心をうち続けている。去る六月九日早朝、NHKラジオ第一放送の「心の時代」という番組で、「一粒米の教え――盲人村長森盲天外の生涯」というタイトルにより、全国に放送された。

最後に、再び草間時福に返って稿を終えたい。「子規博だより」十五巻四号の七ページに、草間時福が、松山中学の教え子たちをいつまでも心にかけていて、「それで教え子ではなかったけれど、子規が死んだときにはお悔みの通知をだしていますね。(和田館長談)」と述べられている。

草間は盲天外に対しても、大正十(一九二一)年、謝恩会のために松山に招かれた際、次の五言律詩を贈って讃えている。

身相類明月　身相は明月に類し
功徳起清風　功徳は清風を起こす
盛夏争寵用　盛夏寵用を争へども
所楽非栄通　楽しむところ栄通にあらず
凉秋忽見棄　凉秋忽ち棄てらるれども
所悲非醜窮　悲しむところ醜窮にあらず
有似得道者　道を得たる者に似たるもの有れども
幾人与汝同　幾人か汝と同じからん
無欲恬淡(てんたん)　世のために尽した盲天外の生き方を讃えているが、讃えた恩師も、讃えられた教え子も、どんなにか嬉しかったことであろう。

(平成八年五月例会講演)　(会員)

(10頁よりつづく)

自分が常盤会寄宿舎にいたからこそ助かったのであり、ことに同室の新海・山崎の二君に万謝すると言っている(「病気見舞」一九二一)

下って明治三十三年の「筆まかせ」の「俊(ほうへん)巳」という小文がある。わが父親隼太(はやた)がある時秋山静氏をそしって「実に人のわるき人なり」と言ったということを聞いた外祖父の観山は、隼太さんのように平生人の是非を言ったことのない人が言うのだから非常に悪い人であろうと言ったということである。そうとすれば父は人のことをかれこれと評論するような人ではなかったようであるし、母も極めて沈黙で、他人を評論するようなことはなるべく避けた人である。それでは「われの好んで他人を俊巳するは果して誰の遺伝なるべきか」と反省している。

最後に、「筆まかせ」第四編に載っている勝田主計からの手紙(ただし、明治十八年、帰省中、当時勝田主計はまだ郷里にあった。)「(前略)君ト両三日ノ対話ハ千万巻ノ書ヲ読ミタルヨリモ猶勝ルカト存候。而シテ此三四日ノ対話ノ中ニモ予ハ兄ノ為ニ大ニ歎スル所有之候。才子ハ兎角己ノ才ヲタノンデ勉強ヲ怠ルカラシテ失敗ヲ来ス事世間マ、有之候。予ハ兄ノ才ニハ驚クナレトモ其勉強ハ余リ感心不致候」と。子規は大事にこの手紙を保存していて明治二十三年になって「筆まかせ」に書き写した。子規の才能は友人の多くが認めるところ、そして学校にあまり行かないで怠けているように思われていたのでこのような批評になったのであろうが、人の目の及ばぬところではよく勉強し、努力し、こうした後輩の批評をありがたく受けて大業を成しとげたのであった。

(平成七年十二月例会講演)

組織者としての子規

―「筆まかせ」について(二)―

越智　通敏

「筆まかせ」第二編以後の顕著な特色は友人のこと、友人との関係を記した記録の多いことであるが、もとより第一編にも多く記されている。子規に親交のある友人が多いということは、子規が組織者としての資質をもっていたことを示している。後に、子規の周りに集まった人びとに助けられて、子規は文学の革新を成しとげることができた。一般的にいって、その事業が大きければ大きいだけ、組織者とそれを助ける人びとが必要である。それゆえ、組織者としての子規を語る場合、これを助けた人びととの関係が重要になる。

「筆まかせ」第三編の「詩文可否の標準」に、大学の教師ムルドックの言葉を引いて、聖人は皆書を著さず、「其人の道を祖述して書をなす者ハ必ず其弟子也」と、ソクラテスにおけるプラトー、アリストートル、孔子における顔回など、釈迦における仏典の結集者、キリストにおけるパウロなど（ただし編者によるまとめ）、いずれも組織者たる弟子または弟子集団による祖述の結果である。そして、たとえば論語のように、はじめ孔子がこの言葉を述べるのにさほど深い意味でなかったものが、後人が註釈を加えることによって光を増すように、子規は、芭蕉の「俳諧七部集大鏡」が、芭蕉の句をむやみにほめ上げていることに言及している。

ともあれ、聖人君子の教えは組織者によって祖述されて光輝を増した。これを組織者としての子規の場合に移すと、祖述する当の人は、代表的には芭蕉であり、すでに弟子たちによって七部集にまとめられているけれども、芭蕉を中心に、俳句の先人たちの句を集成し批判して、その革新の事業を成しとげたのであり、この組織者子規を助ける組織集団が必要だったのである。

事業が大きければ大きいだけ集団が必要であり、人間関係が大切になる。こうした組織者としての子規の自己形成についてはさきに述べたので、人間関係を形成するのに役立った子規の資質を「筆まかせ」の中に見ようとするものである。

さきに、郷土にあるときの「五友」につづいて、上京後同郷の友だち「七変人」の交わりのあったことについては述べた。

子規の友人関係は、塾や予備校、さらに高等中学校から大学へと進むにつれて、下宿や寮など、明治二十一年九月常盤会寄宿舎に入るまでに十六回もかわっており、その間の交友関係が「筆まかせ」に多く記されている。

「筆まかせ」第一編の「処がへ」については、幸い柳原極堂に「子規の下宿がへに就て」があり（子規全集第十巻参考資料）、その要約は『友人子規』に見られる。

子規が東京に出て日本橋区浜町の久松邸に入ったのは明治十六年六月十四日朝のこと、その日出京先輩の友人柳原正之の下宿を訪ねると不在で、はからずも同宿の三並良（子規と再従兄で五友の一人）に会い、やがて柳原正之も外出から帰って数日を共に過ごした。久松邸の書生小屋に一か月を過ごした後、赤坂区に転じたのは須田学舎（漢学塾で、あわせて英語も教えていた）に入ったことにより、さきに従弟の藤野潔（古白）も入っていた。ついで九月二十二日にはここを退舎して久松邸に帰り、十月神田の予備校共立学校に入り、わずか一か月で退学して再び藤野家に帰った。古白の生母で子規の叔母十重は古白七歳のとき病死、世話になったのは後妻磯子であった。当時同郷の清水則遠も同宿して共立学校に通っていた。つぎに「翌十七年牛込に転じ」というのは、藤野家の転居に伴うもので、清水則遠も共に移った。

ついで、「秋再び神田に来り」というのは、清水則遠と共に神田猿楽町板垣善五郎方に下宿したことをいう。これよりさき、この年三月には常盤会給費生に選ばれ（清水則遠はさきに）、九月十一日大学予備門英語科第四級に入学、夏目漱石と級友になった。板垣方への下宿は学校に近かったためである。

この年十一月二十七日、「郷党人物月旦評論」（子規全集第九巻）第一回、第二回を発表した。「月旦」は「月旦評」と同じで、人物批評のこと、後漢の許劭が毎月の初めに郷里の人物を評し合ったという故事にもとづく。子規を中心にこうして互いに人物評をかわし、相互の戒しめとして励まし合ったところに、書生らしい友情と、中国の故事に由るというゆかしさがある。これは、凡例によると、十か月前、すなわち正月、郷友数人が某家に集まったときの坐興に郷党の人物を評論し合ったのを記したもので、「固ヨリ小人ノ讒謗君子ヲ上下スルニ足ラザル」もので、誤りがあれば寛恕せられたいとことわり、評者の名は伏せてある。

あげられた披評者は武市蟠松（京都）・松島正躬・三好巽・小野中為・白岩景行・岩崎一高・三並良・秋山真之・五島武雄・太田正躬・関谷宗之・西原義任・竹村鍛（松山）・松浦政泰（京都）・高川信一・柳原如水・安長知之・松木昇三郎・松木茂俊・吉田清太郎（京都）・小嵜正満（松山）・梅木脩吉（松山）・和田昌訓・正岡常規（以上第一回）である。第二回の批評では、批評者は第一回とは別の者がなり、被評者は現在東京在住の者に限った（いずれも括弧内は現在地、他は東京）。なお、もし第一編・第二編の説を「駁撃」しようとする者は、その主意を書いて無記名で柳原か正岡のいずれかに渡すよう凡例に記している。披評者中第一回と重なる者は省略して第二回の被評者をあげると、松木鼎三郎・清水則遠・大森金二郎・山内正至・横山正脩で、第一回につづいてあげられた者は十三名、在京でありながらあげられなかった者は四名である。

これらのうち、さきにあげた在京の「七変人」中、秋山真之・正岡子規は載っていて、関・菊池・井林の名は見えない。

さらに、これを子規が常盤会から受けていた同時代の給費生を見ると、十一名中に右にあげた月旦評論に名の見える者は、清水則遠・横山正脩・山内正至・柳原正之の四名（ただし、子規と同時受給以前では清水則遠のみ）である。

月旦評論の内容について、後に有名になった人の例をあげてみよう。

秋山真之についての評に「才智多シ、恐ラクハ吾々仲間ニモ少シトスル所ロナリ、必ス大ニナスベシ」とあるのは結果からみて当たっている。もう一人の評では才智を認めた上で「勉強セサレハ退クヘシ」とある（第一回）。第二回の評では、加えて、「面白キ人物」、「喧嘩ニ大胆ナルト一寸器用ナノガ取リ所」、「才子ナリ狡猾ナリ、併シテ才子狡猾両立スルハ世ノ常ナル者ナレハ之ヲ恕スルモ可也」とある。この評論の試みの中心になった子規を、友人たちがどう批評したかは興味深い。第一回の分に二人の批評があるが、結果からみて「非常ノ才アリ其心宇内ヲ呑ム、正直大膽決シテ勉強セサルノ風アリ蓋シ或ハ陰々ニ勉ムル者カ、性倜儻物ニ関セス、我郷里書生ノ冠タル者ハ其レ子カ、他日大名ヲ博スル知ル可シ、然レトモ自負多言スル所アリ」という評が当たっていたことになる。また、第二回の評者二人のうちの一つ「志宇内を蔑視シ世間俗人ノ性情ニ搆ヒ付ケス、漢学ヲ善クシ文才ニ富ムハ子カ天性カト存ス、併シ時トシテハ些少ノ事ノ心頭ニ觸レラレテ不平ノ起ラル、ハ連城玉璧ノ微瑕ト云ハンカ」が的評とみられる。友人たちの間で子規の才能が認められ、ひそかに大成が期待されていたことがわかる。

以上にあげた「郷党人物月旦評論」は明治十七年十一月に発表したものであるが（「筆まかせ」に記載されたものではない）、そのころ子規は、前にも記したように、大学予備門に入って、学校に近い神田猿楽町の下宿板垣宅に、右にあげた月旦評論でも出てくる清水則遠と同宿していた。柳原極堂の「子規の下宿がへに就て」によると、その年の春か前年の暮かに、松山に帰省した藤野漸に伴われて出京、子規と共に藤野宅に寄寓してしばらく共立学校に学び、子規より一学期遅れて明治十八年九月大学予備門に入ったが、常盤会給費生になったのは子規より一か月早く、明治十七年二月であった。月旦評論には、正直で怒るということがなく、度量があって仲間から敬愛された、短才のように見えて愚ならず、大愚のようであったとある。

「筆まかせ」には、清水則遠からの手紙の写し、「清水則遠氏」・「清水則遠氏第二」と三つの記録がある。十八年七月大学予備門を落第した子規は、九月の新学期から清水則遠と同級になったが、その前の休暇を子規は郷里で過ごしたのに対し、則遠は脚気を病んで七月に入って箱根で療養、帰京の前箱根から松山に帰郷中の子規あて八月十二日付けの書簡がある（子規は友人あての自分の手紙の写しを残しているが、それよりはるかに多く友人からの来簡を「筆まかせ」第二編以下に記録、特に第二編に多い）。八月二日付けの則遠あて書簡は落第の知らせをかねたものであったが、その手紙の返事で、自分の病状が少しは快方に向かっていることを報じたあと、かねて共立学校に学んでいたとき寄寓して世話になった藤野から「

至急」の手紙で、学校から五月分の月謝が未納という催促があったことを告げられ、病気を口実にお立て換えを願いたいと言ってやったが、どうも困ったことだと言っている。清水の家はやはり旧藩時代の士族で、貧困のため常盤会の給費生に選ばれたが、生活は楽でなく、病気の療養費さえほとんどなく、医者にもかからず薬ものまなかった。一つには本人自身の無頓着によるものでもあった。

「清水則遠氏」によると、則遠は清水のように淡白で、「黙々として言はず、莞爾として微笑す、独り行き独り止まる」。自分は君を「聖人といはん」「真人といはん」と言って尊敬している。しかし、掃除ぎらいの子規ではあったが、一向に掃除をしようとしない則遠に根気負けして掃除をし、また、こちらが怒ってもにっこりとして意に介しない則遠と同居していると気も長くなって、こんなことで則遠と同居することを望んだとも言っている。則遠の病気は冬になって悪くなるばかりであった。加えて冬の初めに作った制服代四円余を常盤会の給費七円から払うと医療費は全くなく、親元からの為替による送金がなぜか届かない。三月になって病状はますます悪化、為替を請求しても届かず、ついに四月に入ると病気のため通学も困難になった。かねて人の話に衝心症のものには水腫がないと聞いていた子規は、則遠の足がはれるのを見て衝心症は起こるまいと少しは楽観していた。四月十三日の夕方、書替えた為替は届いたものの、この日朝から病人は弱り果てて呼吸困難に陥り翌朝になっても収まらない。為替の金を取りに行く暇もないままに藤野の叔父に相談して金を借り、いったん帰って危篤の病状を見とどけて医師の来診を乞い、叔父のさしずに従って医科大学の大西教授にも依頼、二人の医者の診断を受けたがもはや手の施しようがなく、同宿の井林（大洲出身）に頼んで親あてに「則遠病危篤」の電報を打ってもらった。こうして四月十四日則遠は逝去、死亡届け、寺への依頼、棺の購入、墓地探しなどを友人の協力で終え、翌十五日午後一時出棺、同郷人、同学の友十四、五人で谷中の天王寺（天台宗）で葬儀を行ない、境内の杉の下に葬った。その後下宿で則遠の机上に位牌を祀ること四十九日、さらに二回忌、三回忌まで追善供養をし、松山の家への連絡・報告も懇切に為しとげた。「筆まかせ」の「清水則遠氏第二」には、去年の暮れに到着すべき為替が、四月十三日、則遠危篤の日に届いたことを改めて書き、則遠が子規のすすめで作った俳句二句を記している。その一つ「螢火にひかれて迷ふ土手の道」は、則遠の死を暗示しているようでもある。親友の死を悲しんだ子規の心情と霊を慰めた子規の誠意を知ることができる。

清水・井林と共に板垣に下宿した当時の思い出話「大三十日の借金始末」（第一編一八六～）は貧乏書生の哀歓を物語るものとして興味がある。子規は、毎月の下宿屋への払いが次第に滞り、年の暮れに払うべき借金がなお七、八円あった。下宿屋の細君が十二月二十日ごろから毎日のように催促するので、逃げ口上ばかり言ってはその日を送っていたところ、二十七日ごろ、催促に堪えかねた井林はどこかへ行って帰らないので、清水と子規が催促を受けたが、清水は黙って微笑するだけで、防戦にあたったのは子規であった。たまりかねて大三十日に清水を残して下宿屋を出た子規は、駿河台の

三並の下宿で除夜の鐘を聞き、雑煮をよばれて腹をこやし、その晩は麻布の久松邸に泊った。残された清水は蒲団をかぶって債鬼をのがれ、昼食と夕食は下女が運んでくれたが食うわけにいかず、翌日は雑煮をよばれたが、何分にもまが悪かったということであった。

清水が亡くなったあと、大学予備門に入っていた秋山真之がこの下宿で子規と共同生活をしていたが、二、三か月後海軍兵学校に転じた。九月に新学年が始まると、十月下旬には菊池謙二郎が下宿していた同じ神田猿楽町の尾谷方へ転居、友だちが集まって、「芸まはし」といって都々逸・はやり歌・浄瑠璃などを歌い、このころからベースボールに興味をもち試合をしたが、子規はキャッチャーをした。

翌二十年四月神田駿河台の森田屋に転居、さらに同月下旬神田一ツ橋第一高等中学校寄宿舎に入舎した。十二月、同級生が演説を練磨するためにつくった「一〻会」に入会、郷里での中学時代を回想して、演説は「人の前にて話す」ことの効能があるといっている（第一編演説の効能）。学期末試験の終わったあと、二十五日の午前中演説を行ない、午後は寄宿舎に帰ってベースボール・マッチを行なったあと連雀町の料亭で歓を尽くした。この年村上霽月が第一高等中学に入学、子規との交際が始まっている。また、舎の同級生たちが、容色・修飾・色欲・食欲・膽力・忍耐・勉強・才気などについて点をつけ、投票して平均した結果を順に並べて表にした「点数表」（第一編五四〜）を発表、子規は、才気において一位、食欲において四位、容色五位の三つが上位、残りの膽力・忍耐・勉強・修飾・色欲の順で中位をしめしている。そのほか、八犬伝の芝居の登場人物に誰がよいかを二、三人の仲間でこしらえた「芝居役割」（第一編五七〜）、有名な詩句を上に書きくじであたった友だちの名を下に書いた「鬮引八卦」（子規には「読書白篇義自通」があたっている）、忠臣蔵の芝居の登場人物に仲間をあてた「忠臣蔵役割」（第一編七一〜）（子規は大星由良之助にあてられている）など「ひまつぶしの戯れ」をしているが、いかにもこうした戯れの好きな子規らのしわざらしい。

明治二十一年、七月第一高等中学校予科を卒業、九月より本科一年に進学、同月二十四日本郷真砂町常盤会寄宿舎（監督服部嘉陳、翌年四月より内藤鳴雪）に入り、のち新海非風と同室になった。子規は非風を評して「神経過敏にして……その挙動半狂の人に似たり」と言っているが、互いに論争して教えられるところがあり、のち俳句で子規を取巻く最初の親友となった。

翌二十二年五月九日、子規は突然喀血、同じ町内の山崎元修医師の診断は肺病ということであった。翌晩十一時ごろにも再び喀血、その夜一時ごろまでの間に「時鳥」という題で、「卯の花をめがけてきたか時鳥」など連作四、五十句を作り、この時以来「子規」と号した。喀血はその後一週間もつづいた。この年の記録「常盤の芸くらべ」（筆まかせ第一編一七二〜）は、二人の友だちの力を借りてこしらえたおどけ番組で、相撲の番付にならって「常盤のやさ男隠し芸の見競」表を作ったもので、子規には格別の隠し芸がなかったものか、西方前頭の最下位に、「ボール　正岡」とある。ベース

ボールに最も興じたのは常盤会寄宿舎にあったころで、友だちを引き入れては試合をした。「Base Ball」と題する「筆まかせ」の文で、「ベース・ボール程愉快にてみちたる戦争は他になかるべし」と言っている。

九月の新学年から第一高等中学校本科一部二年に進級、漱石・菊池寿人などと同じクラスになった。やがて寄宿舎を出て下谷黒門町上野不忍池畔の木村方に仮寓、十一月七日夜、鳴雪（当時寄宿舎監督）・竹村鍛と子規の三人で始めた言志会（漢詩・聯句・連歌の会）の初めての会合に参加、月末ごろ再び常盤会寄宿舎に帰り、十二月、上野無極庵で行われた「松山会」に出席、演説の前座で「松山人の性質」について、松山人は模倣的人間であり、また批判的人間であることを話し、終わりに、かねてこしらえていた「東京松山比較表」（竹村など五人の友だちで作成したもの）を読み上げ座興を盛り上げた（第一編「松山会」一九三〜）。また、この月舎内に「ボール会」を設け、上野公園空地で二回ほどベースボールに興じた。さらに同月下旬、新海非風・五百木瓢亭の三人で向島の雪見の帰り、鮨屋で相談して「紅葉会」をおこし、回覧雑誌「つゞれの錦」を出すことを決定した。こうして舎内で起こした「ボール会」や「紅葉会」などの活動が舎生の勉学のさまたげになると、舎の先輩舎監佃一予らが反対して圧迫を加えた。

明治二十三年三月十五日から書き始めた「筆まかせ」第三編には、ひまつぶしの戯れが多く記されていて、友交関係のほどがよくわかる。三月十八日夜に行われた「畫の合作」（三八六〜）は、竹村・勝田・新海・寒川ら六人で行なったもので、判紙一帖ほどを費して墨で絵を合作したもの、「常盤会寄宿舎の遊戯」（三九三）には、鉄棒・高飛・桿飛などをしたが、昨年の夏以来追々ベース・ボールが盛んになり、だんだん仲間を引入れて昨年末には二十人ほどになったから、右に記した「ボール会」を設立したこと、また、室内遊戯としては一昨年来トランプが流行したが、昨年夏ごろから衰えたことが記されている。さらに近ごろは「口あひの洒落」が流行して、左棟二階の舎生は皆仲間になったとし、「洒落之番附」（三九六〜）には、「常盤の洒落男六人鏡」と題して角力番附にならって六人を位置づけ、自らを西の小結としている。また、三月には、同じような戯れ趣味で「舎生弄球番附及び評判記」（四〇〇〜）と題する番附を発表、東西の大関に勝田主計と竹村鍛を配し、東西十名ずつの名をあげてそれぞれに短評を加えているが、自らの名は見えない。

また、同様の趣向でできたものに、舎生をそれぞれ鳥に見たてたものがあり、「鳥のみたて」（四一七〜）と題しているが、この発企者は子規ほか二人で、子規は時鳥、寒川鼠骨は百舌鳥、内藤鳴雪は鶴などと見立てられている。さらに「酒量くらべ」（第三編、四四九〜）は、常盤会寄宿舎二十三人を番付けして表にしたもので、「もし間違ひあらば一升おごりましよう」とあるのがおもしろく、子規は東方前頭六番目にあがっている。これらは単なる戯れであるが、寄宿舎内における郷土出身者が、年齢差を越えて和楽したことを示すものとして興味深い。同じ二十三年中の「筆まかせ」の記事に「寛？厳？中庸？」と題する長文の随筆がある。単なる戯れや和

楽と違って、毎月一回舎内の食堂で開いた「茶話会」は、当時青年に関心の深かった演説の稽古を目的とするものであったが、内藤鳴雪が監督になってからは時々孟子の講義も行われた。講義の演説が終わると茶菓で談話をかわした。舎生は順次演説をしなければならぬという勉強会であった。六月の末に行われた例会は午後七時から開かれ、内藤監督も出席、舎生は十余名集まった。この会は、監督の指導の下に舎監を勤めた佃一豫が大学を卒業して舎を去ることになったので、その功労に感謝するためのものでもあった。まず幹事伊藤泰が立って送別の言葉を述べ、つぎに勝田主計が、佃氏は舎を修めるに厳であったため非難を受けたがあえて動揺しなかったと賞讃の辞を述べ、つぎに新舎監に望むところとして、寛に失せず、中庸で行ってほしいと述べた。これが子規の「筆まかせ」の文の表題になっているわけである。ついで立った当の佃一豫は、自分はこの寄宿舎の運営を厳にしようと思ったが、残念ながら行われなかった、このような無気力な寄宿舎には全く望みを断った、この寄宿舎の出身者で天下に立って名誉を博する者は一人も出ないであろう、自分はここを去って、これからは「同郷会」で仕事をしようと思っている、同郷会の青年には有為な者があるだろうから、そこで極めて厳なる教育をしようと思っていると、慷慨悲憤の気を顔色に現わして演説した。

ついで立った子規は、急に演説を頼まれ、何の用意もないので学校で習った心理学の請け売りをするつもりですと前置きし、佃君は寄宿舎に人物がいないと言われたが、それはいかにも人を馬鹿にしたような言葉ですけれど、これも熱心に寄宿舎を愛せられるの余り、失望してこの語を吐かれたのだと思ひます。私は佃君が熱心に寄宿舎の為に尽くされたということは信じて疑いません、と称讃の言葉を述べた。それから、寛厳とか中庸ということが出ましたが、勝田主計の論を受けて心理学の講義に移り、感情と外部への適応、そして自動的模倣について説き、だから舎監はもちろん年長者は、わが身を修めて他人の手本となるようにしなければならない、そうすればこの寄宿舎は自然に治まって行くと思いますと結んだ。

以上は、子規が仲間のひまつぶしの戯れから舎の生活や交友の情にまで及んだわけである。ついては、戯れは別として、人物評が行われて交友関係を破壊しなかったことは、その中心にあった子規と友人との間に、信頼にもとづく友情のきずなが強かったことを意味するもので、これが組織者としての子規の重要な資質であったことはたしかであろう。

これまでにあげた人物評で、友人たちは子規の長所を讃えることが多かったが、ごく親しい友人は子規の短所も見抜いていた。

（以下10頁上段につづく）

子規会報 第七十一号
季刊（四、七、十、一月）
発行日 平成八年十月十九日
発行 松山子規会
松山市末広町正宗寺内
郵便振替 徳島二一一八六八

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ

四季の移り変わりを楽しめる露天
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

ホテル 春日園

〒790 松山市道後鷺谷町3-1
☎(089)941－9156

お食事処…かすが…

石畳，格子戸，木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

新刊案内

第11回愛媛出版文化賞受賞作品

子規点描　喜田 重行 著

B6判 274頁 定価1,600円

自費出版

お気軽にご相談下さい。
編集からお手伝いさせて頂きます。

印刷＆出版　(有)青葉図書

〒790 松山市小栗6丁目3－23　☎089 (943) 1165

あなたも“心のふるさと”を訪ねてみませんか

四国八十八ヶ所順拝

発心した月から一年で満願できる

平日
日曜
遍路

伊予鉄道株式会社

〒790 松山市湊町4-4-1
観光課☎(089)948ー3114

¥ 300